

# 近代における壊れものとしての私的身体

宮 本 陽 子

## Fragilité du corps privé à l'époque moderne

Yoko MIYAMOTO

### 1

「フランス語（宮廷のことば）も貨幣も、流通するためには王の刻印が付されていなければならない<sup>1)</sup>。これはシャルル・ペローが『古代人と近代人との対比』に登場する法院長に語らせたことばであるが、興味深いのはここにおいて、「流通 (être en mise)」よりもむしろ「王の刻印」にアクセントが置かれていることである。つまり、言語と貨幣という、いずれも流通、交換により、ひとつひとつ、ひとつものを関係づける二つの社会的媒介物が、王権による支配の媒介として語られていることである。言語も貨幣もここでは王とひと、王とものを関係づけるものとして語られていると言ってもよい。貨幣が支配空間を拡大し、国王と貴族を緊密に結びつけるという意味において、また、「純粋なフランス語」が王権肯定のディスクールに捧げられ、国王と宮廷人を結びつけるというかぎりにおいて、ペローのこの表現は正しい。

じっさい、十七世紀フランスは、ルイ十四世の絶対王制が、以前の政体を無秩序として峻別しながら、言語、経済、法律、地理を統べるひとつの単位としての近代国家の秩序を形成した時代である。国王主導のもとにアカデミー・フランセーズによって国家語としてのフランス語が確立され、国家政策として交通網の整備が推進され、市場が拡大する。さらにまた、王権による武力と租税の独占が、貴族に対する国王の支配形態を根本的に変革し、支配力を絶対的な

1) Charles Perrault, *Parallèle des Anciens et des Modernes*, tome III, J.-B. Coignard. 1692, pp. 113-114, (Slatkin, 1971, p. 225), cité par Jean-Marie Apostolides, *Le Roi-machine : Spectacle et politique au temps de Louis XIV*, Editions de Minuit, 1981, p. 31. ペローのこの作品は、序文のあとに、「偉大なる王ルイの世紀」という詩を掲げていることから明らかなように、また、同時代の文芸作品の多くがそうであるように、ルイ十四世の中央集権国家体制を限りなく肯定する。引用部では、フランス各地の方言を否定すると同時に、かつてのギリシアが十七世紀フランスのような統一国家でなかったことからギリシア古典作品に表現の不統一が見られることを批判している。

ものにする。すなわち、貴族から武力を奪い取り、暴力を独占した国王が、租税をも独占し、そこから得た貨幣収入を貴族たちに年金として支給する<sup>2)</sup>。中央集権国家体制の実現はこうして、王権による言語と貨幣という媒介の独占によって徹底された。

ところで、国家が国王を核として一体化、同一化を目指すとき、個人もまた、みずからの同一化に向かう。十七世紀後半を、非同一性から同一性への転換期として定義するジャン＝マリー・アポストリデスは、不変性と安定性を前提とする同一性が、自己イメージと現実を近づけようとする弛まぬ努力によって実現される点に注目する。彼によれば、人間の在り方は、一瞬ごと、一行為ごとにみずからのすべてを燃焼させ、消費し尽くすバロック的存在から、資本を貯蓄するかのようになり、評判や自身の在り方を自己イメージに向けて丹念に積み重ねてゆくブルジョワ的存在へと変わり、ひとは個人として線的時間を生き始める<sup>3)</sup>。

十七世紀は、国家においても、個人においても、この同一性世界の指標となり、保証となるひとつのイメージを必要としたが、それは国王というイメージでなければならなかった、とアポストリデスは言う。同一性世界をつかさどる原動力の顕現としての国王というイメージ、「王の輝かしいイメージ」<sup>4)</sup>に具体的な形を与えるために、当時の芸術、とりわけ、演劇等の視覚芸術がいかに貢献したかについては、アポストリデスの『機械としての王』に詳しい<sup>5)</sup>。こうして示された王の身体の表象によって、「歳とともに衰える君主の私的な身体」<sup>6)</sup>を覆い隠し、消し去ろうとするのである。

国王は芸術によって表わされたみずからのイメージに自分の現実を近づけるために努力しなければならず、また、貴族やブルジョワは、イメージとして表された王を、近づけるべき自己イメージの普遍的なモデルとした、とアポストリデスは続けるが、彼の指摘は別にしても、たしかにこの時期において、時間のなかで努力を重ねることによって実現される同一性が、ひとつの重要な規範となってゆく。1665年に書かれたモリエールの『ドン・ジュアン』において、ドン・ジュアンの父、ドン・ルイは息子の放蕩を見かねて言う、「祖先たちの栄光にあずかるには、わたしたちも彼らにふさわしくなるように (leur ressembler) 努めなければならない。

2) Norbert Elias, *La Dynamique de l'Occident*, traduit de l'allemand par Pierre Kamnitzer, Presses Pocket, 1990. Jean-Marie Apostolidès, *op.cit.* 水林章『ドン・ジュアンの埋葬』, 山川出版社, 1996年, pp.38-83, 参照。

3) Jean-Marie Apostolidès, «L'Ordre identitaire classique», dans *Ordre et contestation au temps des classiques*, tome I, Biblio 17, n° 73, 1992, pp. 11-31.

4) *Ibid.*, p. 29.

5) Jean-Marie Apostolidès, *Le Roi-machine : Spectacle et politique au temps de Louis XIV*, Editions de Minuit, 1981.

6) Jean-Marie Apostolidès, «L'Ordre identitaire classique», dans *Ordre et contestation au temps des classiques*, tome I, Biblio 17, n° 73, 1992, p. 29.

わたしたちが彼らの真の子孫として認められるには、彼らの名誉となり、彼らが残してくれた足跡にしたがい、彼らの徳に決して泥を塗ることがないようにして、彼らのありがたい偉功に報いなければならない（下線強調は引用者，以下同様）<sup>7)</sup>。ここにおいて語られているのは、個人の同一性というよりも、一族の同一性であり、また個人の時間は過去の実現に捧げられているが、これより13年後、1678年にラファイエット夫人によって書かれた『クレーヴの奥方』においては、完全に個人的な同一性についての表現が観察される。「夫に対する義務、あなた自身に対する義務を忘れてはなりません。そして、あなたがこれまで得てきた評判、わたしがあなたのために心から願ってきた評判を失おうとしているのだと考えなさい」<sup>8)</sup>。これは、高位の貴族であり、きわめて気位の高い (*extrêmement glorieuse*)<sup>9)</sup> シャルトル夫人がヌムール公に心を惹かれている娘、クレーヴ夫人に語る最後のことばある。ここにおいて、「義務」は過去の祖先に対するものではなく、自身とその配偶者に対するものであり、また、大切なのは過去の栄光ではなく、自身が「これまで得てきた評判」である。クレーヴ夫人が恋のために「義務」を怠り、「評判」を失うなら、「ほかの女と同じように身を落とす」<sup>10)</sup>、とシャルトル夫人は言う。つまり、同一性を失う、というわけである。

こうして、同一性は自己を律する規範となってゆくが、それは他者のまなごしの内在化によって行なわれるので、ひとは自分のなかに分裂を抱え込むことになる。「評判」という他者のまなごしのなかで獲得された自己イメージが、情念の表出を警戒し、自己を厳しく監督する。内なるものとなった他者のまなごしが自己を観察し、他者を警戒し、自己と他者を隔て、自己イメージと現実の自分に個人を引き裂く。

アポストリデスに先立ち、十七世紀フランスについて考察したノベルト・エリアスは、ルイ十四世を指標とする宮廷社会を、観察のまなごしが網目のように張り巡らされた世界として描きだしている。エリアスによれば、宮廷社会内部においては、「個人をつねに彼が生活している社会との関わり合いにおいて、すなわち、他者と関係を持つ人間として観察（イタリック体強調は原著者，以下同様）」することが必須となり、こうした観察は他者だけではなく、観察者自身にも及ばざるをえない。エリアスはラ・ブリュイエールの文章を引用しながら、「宮廷人が、表面上は隠蔽され、抑制された他人の行動様式の背後に真の動機や原動力を捜すことを余儀なくされるように、そしてまた競争相手の冷静な態度の背後に彼らを駆り立てている情念や関心を

7) Moliere, *Don Juan ou le Festin de Pierre*, œuvres complètes de Moliere, Saint-Clair, 1975, p. 370.

8) Mme Lafayette, *La Princesse de Cleves*, dans *Romans et Nouvelles*, Classiques Garnier, Bordas, 1990, p. 291.

9) *Ibid.*, p. 261.

10) *Ibid.*, p. 291.

嗅ぎ取ることができなければ敗北してしまうように、彼自身も自分の情念をよく知り、隠すことができなければならない」<sup>11)</sup>、と分析する。

エリアスの関心は同一性よりも、むしろ他者のまなごしの内在化が自己抑制装置として機能するという点に向けられ、ここでは、個人の乖離は「表面」と「隠れているもの」、外面と内面という形をとる。しかし、自己抑制によって再構成された外見が情念を押し隠すというエリアスの指摘も、また先に見た、「王の輝かしいイメージ」、すなわち、王の身体の表象が、その陰画、すなわち、「歳とともに衰える君主の私的な身体」を消去しようとしたというアポストリデスの指摘も、近代における個人を、身体の表象と私的身体という分裂を抱えた存在として描きだす。他者のまなごしによってみずからを分断し、情念あるいは私的身体の不穏な動揺を排除すべき他者としてみずからのなかに封じ込めることになった存在、他者を包括しつつ排除することで自己同一性を可能にしようとする存在、それが近代的個人である。

ところで、ルイ十四世の絶対王制について考察しているこのふたりの研究者は、同時代に書かれたさまざまなテキストを資料として参照するが、アポストリデスが引用するのは主に演劇作品、あるいはデカルトやマルブランシュの文章であり、エリアスはラ・ブリュイエールの『ひとさまざま』<sup>12)</sup> やサン・シモンの『回想録』<sup>13)</sup> を引用する。小説作品については両者ともほとんど言及していない。これは、小説というジャンルが当時、国家政策に積極的に関与することのない、いわば二流のジャンルであり、演劇とは権力とのスタンスの取り方が違っていたことや、歴史的証言としては回想録に比べて史実から離れた記述であると判断されるからであろう。しかし、それだからこそ、権力の周辺部にある小説において、国家と個人の近代化がいかに書き込まれているかは一考に値するのではないか。しかも、近代の発明とも言うべき「個人の内面」についての記述を、以後も引き受けてゆくのは、むしろ小説ジャンルである。ひとつの明確な中心によって統一された近代という制度のなかにあり、またみずからのなかに内面化された近代を抱える個人は、しかし、近代の制度によって回収されないものも同時に抱える存在である。歴史や制度から焦点を個人に移すなら、あるいは、歴史や制度に回収されないものから近代を考察しようとするならば、小説の記述は貴重な証言となるだろう。ここでは、十七世紀後半に数多く書かれた小説作品のなかから、近代の制度と個人の関わりがもっとも明確に現れていると思われる『クレーヴの奥方』を考察の対象に選びたい。

『クレーヴの奥方』は、すでに引用したペローやラ・ブリュイエールの文章よりも、10年以上

11) Nobert Elias, *La société de cour*, traduit de l'allemand par Pierre Kamnizer et par Jeanne Etoire, Flammarion, 1985, p. 99.

12) La Bruyère, *Les Caractères*, 1688-1696.

13) Saint-Simon, *Mémoires*, 1715.

前に書かれた中篇小説である。国王のイメージを創出してきた演劇の全盛期がすでに去り、ラシーヌが『フェードル』<sup>14)</sup>を出し、論争を起こした翌年、1678年に発表された。宮廷人の回想録のような体裁のこの『クレーヴの奥方』は、物語内で生起する歴史的な出来事に、アンリ二世の死の前後、すなわち、1558年夏から1560年春までという明確な時間枠を与えているものの、執筆と同時代、すなわち十七世紀後半のフランス語や貨幣同様、絶対王制近代国家の「国王の刻印」がくっきりと、しかも、独特なやり方で刻みつけられた作品である。国王と個人、自己と他者が、アポストリデスやエアスの描く宮廷模様と一見、類似した配置を見せながらも、重大な差異を顕わにしてゆく。わたしたちはこの類似と差異を装置として、『クレーヴの奥方』の解読を試みることにする。

## 2

前章冒頭の引用でペローは「流通 (être en mise)」ということばを使っているが、ペローの言う流通とは、もちろん、資本主義的自由競争の流通ではなく、国王を中心とする同心円のなかで通用するという意味での流通である。この同心円のなかのひとと物はすべて、交換価値として、国王のまわりを流通する。絶対的中心としての国王だけが不変であり、周囲はすべて交換可能である。したがって、交換価値とはまずなによりも国王にとっての交換価値であり、価値を保証するのも国王であるから、王が交代するときは、まるで通貨の変更のように周囲も一変する。『クレーヴの奥方』の舞台とされているアンリ二世の宮廷においても、ヴァランチノワ夫人が国王の私的な身体を支配しているにせよ、王権としての国王にとっては彼女も交換可能な惑星のような存在にすぎない。「国王そのひとと国家の支配者と言ってもよいくらい」<sup>15)</sup> 権勢を誇り、「この国王の時代になってから12年間、すべての絶対的支配者として、役職を決めるのも政治のことも思うがままにしてきた」<sup>16)</sup> ヴァランチノワ夫人と言えども、やがて、アンリ二世の急逝と同時に、あっけなく宮廷を追放されることになる。同時に、彼女がアンリ二世からあずかっていた印璽、王家の宝石類も国家に返還しなければならない<sup>17)</sup>。国王の私的な身体は滅び、その崩壊とともに、これに依存していたものはもちろん、王権がかりそめに貸与していた地位や位相も入れ替えられるが、国家は新しい国王を王権という同心円の中心に据えて、新

---

14) Racine, *Phèdre*, 1677.

15) Mme Lafayette, *La Princesse de Clèves*, dans *Romans et Nouvelles*, Classiques Garnier, Bordas, 1990, p. 256.

16) *Ibid.*, p. 281.

17) *Ibid.*, pp. 376-377.

たな流通、交換によって存続する。

たしかに、物語の場所はすべて、王を中心とする同心円のなかに置かれている。クレヴ公とシャルトル嬢の出会いは、恋の不意打ちにによってクレヴ公に我を忘れさせ、しばしのあいだ、彼を社会的コンテクストから解放するが、しかし、舞台となっている場所は、「王妃（カトリーヌ・ド・メディス）についてフィレンツェからフランスにやって来た」宝石商の店である。「世界中を相手に取引をし（*trafiquait*）」、「商取引（*son trafic*）でたいそうな富を築き、商人の館というよりも、大貴族の館かと思われるほどの邸宅を構える」宝石商の店である<sup>18)</sup>。つまり、宝石商自身が国王の刻印のもとに移動、流通するものであると同時に、世界中と流通交換を行い、その結果得た富によって、場所の移動のみならず、身分の移動をもしつつある商人であり、「フランス語」や「貨幣」同様、流通と交換のシステムを体現するものである。この宝石商の店には王の姿はないものの、やはり、国王を焦点とする遠近法のなかにあり、クレヴ夫人とヌムール公が出会う宮殿の大広間と同じ同心円のうちにある。この同心円から外れるためには、ギース騎士のようにロードス島に死を求めて旅立つか<sup>19)</sup>、クレヴ夫人のように隠遁生活に入るしかない<sup>20)</sup>。ここでは、商人の店はおろか私邸さえも、宮廷の延長上にあり、この宮廷社会に生きるかぎり、時間についても、王を中心とした時間割が優先される。

クレヴ公との結婚後、毎日、宮廷通いで、「宮廷のただなかに身をさらしている」クレヴ夫人であるが、彼女が宮廷人たちを相手にするのは宮廷においてだけではない。「恋愛めいたことの好きな若者たちはだれでも、クレヴ夫人の私邸や、どんな客でも歓迎する義兄のヌヴェール公の館でクレヴ夫人と会うことができ」る<sup>21)</sup>。クレヴ公が夫として妻にする命令はただひとつ、パリで宮廷人たちとつきあうこと、「大勢の客を家に迎える」こと<sup>22)</sup>、つまり、宮廷人としての務めを果たすことである。「生来、気立てがやさしく、夫人に甘い」クレヴ公であるが、ヌムール公を避けるために引きこもって暮らしたいというクレヴ夫人に対しては、「夫人が暮らしを変えることを、絶対に（*absolument*）許さな」い<sup>23)</sup>。クレヴ夫人は「夫からどうしても行くようにと命令（*commander absolument d'y aller*）」され、気が進まないまま、王女の婚礼を祝う集まりに出かけてゆく<sup>24)</sup>。

王に代わって妻に絶対命令を下すクレヴ公も、王の呼び出しを受ければ、どこにしようが、

18) *Ibid.*, p. 261.

19) *Ibid.*, pp. 322-323.

20) *Ibid.*, p. 415.

21) *Ibid.*, p. 273.

22) *Ibid.*, p. 303.

23) *Ibid.*, p. 311.

24) *Ibid.*, p. 360.

なにをしていようが、いつでも馳せ参じなければならない。母親を失って悲しみに暮れるクレーヴ夫人を残し、パリに出かけたクレーヴ公が妻のもとに「戻るのは、約束の日の翌日になってから」のことである<sup>25)</sup>。親友サンセールがトゥールノン夫人を失って、絶望の底にあるときも、クレーヴ公は「友を残して、王のもとに行かなければならぬ」<sup>26)</sup>。また、クーロミエの別荘で、妻から他に思いを寄せる相手がいるという告白を聞かされた直後、強い衝撃を受けて呆然としているクレーヴ公に、王からの使いがやって来て、「夜までにパリに戻るように」という命令を伝える<sup>27)</sup>。

血縁関係や派閥のしがらみから比較的自由であるように思われるヌムール公も、この点に関しては例外ではない。クレーヴ夫人と出会ってから、彼女を強く愛するようになったヌムール公は、彼女が来るはずのサン＝タン Dre 元帥の舞踏会に出たいと望みながらも出席できない。「王の命令でフェラーラ公を迎えに行か」なければならないからである<sup>28)</sup>。また、クレーヴ夫人の告白を聞き、「喜びと悲しみ、驚きと賛嘆」で「分別もつかないありさま」であっても、ヌムール公は「王のお供で」スペインに行かなければならない。「断ることのできない旅行だったから」である<sup>29)</sup>。

こうして、宮廷人の私的時間は王権の介入によって、分断され、切り取られ、王のために捧げられ、私的感情に支配されていた身体も、そのあいだは王のものとなる。

それでは、十七世紀フランス宮廷に置かれてしまったような、このアンリ二世に、太陽王のような強くて輝かしいイメージが付与されていると言えようか。たしかに、アンリ二世は命じ、禁じ、決定する。豪華な宴会、見世物を主催する。「フランスで、アンリ二世の晩年ほど贅沢と色恋が華やかさをきわめたことは (avec tant d'éclat) かつてなかった」<sup>30)</sup>、という文章で物語が始まるとおり、宮廷の人物紹介の部分では、アンリ二世は、たしかに、輝き (éclat) に満ちた王である。気前のよい恩典によって、サン＝タン Dre 元帥に「箔 (un éclat) をつけてやる」華やかな王であり<sup>31)</sup>、「あらゆる武芸に秀で」<sup>32)</sup>、「戦いに精通した」<sup>33)</sup>王である。しかし、アンリ二世が強くて輝かしいのは、冒頭においてのみである。人物紹介が終わって、主要人物たちの恋愛の物語が始まり、歴史的時間に置かれていた人物たちが、個人的な時間を生き始めると

---

25) *Ibid.*, p. 292.

26) *Ibid.*, pp. 299-300.

27) *Ibid.*, p. 354.

28) *Ibid.*, p. 285.

29) *Ibid.*, p. 402, p. 411.

30) *Ibid.*, p. 253.

31) *Ibid.*, p. 258.

32) *Ibid.*, p. 253.

33) *Ibid.*, p. 258.

同時に、王は輝きを失い始める。「若さに珍しく慎重な」<sup>34)</sup> クレーヴ公が、王からモンパンシエ公の嫡子が結婚を禁じられたシャルトル嬢と結婚する。「成熟した年齢の」<sup>35)</sup> ヌムール公が、王の勤めるエリザベス女王との結婚を、クレーヴ夫人への思いのために反故にする。王の呼び出しにいやいやながら馳せ参じる人物たち。華やかな宮廷絵巻が描かれるいっぽうで、輝かしい王権をたたえるディスクールはない。少なくとも、先に引用したペローの『古代人と近代人の対比』やモリエールの『タルチュフ』、ル・モワヌの『統治術』に見られるような、王の偉大さを賛美するディスクールはない。

『古代人と近代人の対比』におけると同様、1664年に発表された『タルチュフ』においても、また1665年に出版された『統治術』においても、そこで語られる王の偉大さは、恋愛や武勲の華やかさではなく、権力の正しい行使を根拠としている。権力の正しい行使とは、すべてを正しく見ることに他ならない。前者においては、一家長の過ちによって引き起こされたブルジョワ家庭内の混乱が王権の介入によって解決される、という筋書きそのもののなかに、ブルジョワジーの私的領域の闇にまで届く王権の輝かしい光が観察される<sup>36)</sup>。そのうえ、タルチュフを逮捕しにやってきた捕吏による王をたたえるディスクールが最後を飾るという念の入りようである。彼は言う、「王のまなごしは人心をすべてお見通し (se faire jour) です。(…) 鋭い判断力をお備えになった王の偉大なお心は、つねに物事を正しくごらんになります」<sup>37)</sup>。まさに、王のまなごしは蒙昧を正し、闇を排除する光であり、捕吏は王のまなごし、王の権力、王のことばの媒介としての機能に徹している。いつでもどこでもアンリ二世に呼び出され、出仕することを余儀なくされているものの、王の意志の媒介というよりも、噂話、それも王にとって不名誉な噂話の媒介として機能している、『クレーヴの奥方』の宮廷人たちと、『タルチュフ』の捕吏とでは、王に仕えることの意味がまったく異なる。

また、作品総体が王権をたたえるディスクールとなっているとも言うる、ル・モワヌの『統治術』においては、いたるところで、王と光 (la lumière)、太陽、まなごしを結びつける表現が観察されるが、その最たるものは、やはりアポストリデスも引用している、「わがまなごしは日の光の届くところ、すべてに行き渡る。(…) 目であり、光であるわれがすべてを見るには、われひとりあればよい」<sup>38)</sup>、という一節であろう。これについて、アポストリデスは、「王

34) *Ibid.*, p. 255.

35) *Ibid.*, p. 283.

36) 水林章『幸福への意志』、みすず書房、1994年、pp. 118-125、参照。

37) Molière, *Tartuffe*, Acte V, scène dernière, Flammarion, 1997, pp. 145-146.

38) Pierre Le Moyne, *L'art de régner*, 1665, p. 216, cité par Apostolidès, *Le Prince sacrifié: Théâtre et politique au temps de Louis XIV*, Editions de Minuit, p. 33.



=太陽の光に照らされるものは輝き、これを避けるものは外部の闇に追放される]<sup>39)</sup>と解説し、さらにまた別の場所で、神であると同時に君主である全能者のまなざしについて、「見ること (regarder), それはすでに裁くこと (juger) である」と述べる<sup>40)</sup>。

いっぽう、『クレヴの奥方』は、この全能者のまなざし、「光と秩序を与える王のまなざし、闇を晴らし、真実を明らかにする王のまなざし」<sup>41)</sup>を決定的に欠いた世界である。宮廷を彩る宝飾の輝き (un éclat)<sup>42)</sup>はあっても、真実を照らし、秩序を与える光 (la lumière) はない。アンリ二世とモンゴメリー公の運命のトーナメントで、「ふたりの槍が折れ、モンゴメリー公の槍の破片 (un éclat) が王の目に突き刺さり、抜けなく」なる<sup>43)</sup>。光のまなざしを持たない王の目に輝き (un éclat) が闖入したために、アンリ二世は命を落とす。輝く破片が王を殺す、王を闇に突き落とす。光のまなざしを持たない王を中心に据えた『クレヴの奥方』の宮廷社会は、近代のシステムを採用しながらも、華やかな舞台装置のすぐ後ろで、闇が口を開いている世界である。闇は宮廷の外部にあるのではない。闇のなかにアンリ二世の宮廷がある。

### 3

王権による文化政策の一環として、中世封建制度以来の古い世界を葬り、近代を受け入れるという「喪の仕事」に携わってきた演劇<sup>44)</sup>が、王の輝かしいイメージに具体的な形を与えるものであったとすれば、『クレヴの奥方』は、「王の輝かしいイメージをその中心で蝕む陰画、すなわち、歳とともに衰える君主の私的な身体」<sup>45)</sup>を、近代の制度と分かちがたいものとして描きだしていると言えよう。「王の輝かしいイメージを蝕む陰画」が描かれてゆくにつれ、王権と王権を中心とする社会も反転したさまを見せ始める。

指輪をめぐるヴァランチノワ夫人との諍い<sup>46)</sup>等、王についての不面目なエピソードが語ら

39) Apostolidès, *Le Prince sacrifié: Théâtre et politique au temps de Louis XIV*, Editions de Minuit, p. 33.

40) *Ibid.*, p. 37.

41) Apostolidès, *Le Roi-machine: Spectacle et politique au temps de Louis XIV*, Editions de Minuit, 1981, p. 47.

42) *La Princesse de Clèves* において“éclat”という単語の頻度が高く、また重要な意味を持つことについては、Jean-Michel Delacomptée, *La Princesse de Clèves: la Mère et le coutrisan*, Presses Universitaires de France, 1990, pp. 34-41. を参照。

43) Mme Lafayette, *La Princesse de Clèves*, dans *Romans et Nouvelles*, Classiques Garnier, Bordas, 1990, p. 374.

44) Apostolidès, *Le Prince sacrifié: Théâtre et politique au temps de Louis XIV*, Editions de Minuit, p. 178. 水林章『幸福への意志』、みすず書房、1994年、pp. 101-129. 参照。

45) Apostolidès, «L'Ordre identitaire classique», dans *Ordre et contestation au temps des classiques*, tome I, *Biblio* 17, n° 73, 1992, p. 29.

46) Mme Lafayette, *La Princesse de Clèves*, dans *Romans et Nouvelles*, Classiques Garnier, Bordas, 1990, pp. 295-296.

れ、私的な身体としてのアンリ二世がいかにか卑小な人物として描きだされようとも、王権とは別の事象として切り離すことができる。しかし、物語のなかで、先代の王フランソワ一世から当代のアンリ二世、そして、次のフランソワ二世と三代に渡って国王が並べられ、しかもその女性関係を通じて、いわゆる男性らしさが比較されるように配置されると、それぞれの王がジグソーパズルの駒のようにひとつの王権としての形を成す。

シャルトル夫人が語る先代の王フランソワ一世のエピソードも<sup>47)</sup>、王太子妃の語るイギリス王ヘンリー八世のエピソードと同様<sup>48)</sup>、乱脈な女性関係に彩られているが、それでも、ジャン＝ミシェル・ドゥラコンテも『クレヴの奥方、母と宮廷人』において指摘しているように<sup>49)</sup>、この王たちは自分の意思で女性を選ぶ王であった。どの女性を相手にするかは王の一存にかかっていた。これに対し、当代のフランス王アンリ二世は女性から恋人として選ばれた王である。彼に「豪胆さや威勢のよさが欠けている」、つまり、いわゆる男性らしさの属性とされていたものが欠けていることを心配した父親フランソワ一世が、愛人のヴァランチノワ夫人に相談し、これを受けて彼女は、「もっと活発で魅力のある」王子にしてやるためにと、アンリ二世を自分の恋人に選んだのである。父親の愛人から恋人として選ばれたアンリ二世は、欺き、欺かれ、「もう二十年以上も経つというのに」<sup>50)</sup>、今でもヴァランチノワ夫人への思いは冷めず、遠慮をしながら嫉妬に苦しむという情けないありさまである<sup>51)</sup>。アンリ二世にとって、女性とはもはや権力や威信に輝きを添える記号として機能していない。そしてさらに、次代の王権をになうべきフランソワ二世はまだ十五、六の若年であることに加えて、病弱の身であり、彼の病床の枕許に付き添う<sup>52)</sup>一歳年上の王太子妃の夫というよりも、子供のような存在である。即位すること以外には、男性であるというしるしをまったく与えられていない、女性関係以前の存在である。物語のなかでは即位するところまでしか語られないが、じっさい、歴史によれば在位一年で亡くなる儂い王である。

こうして見わたすと、フランス国王の力が三代に渡って下降線をたどってゆくさまが、いやでも浮かび上がる。浮かび上がるように描かれている。三代に渡る王の私的な肉体の衰えが、権力の中核としての王のイメージを蝕む。しかも、交換価値としての女性を男性らしさや権力

47) *Ibid.*, pp. 278-279.

48) *Ibid.*, pp. 314-316.

49) Jean-Michel Delacomptée, *La Princesse de Clèves : la Mere et le coutrisan*, Presses Universitaires de France, 1990, pp. 102-103, 114-115.

50) Mme Lafayette, *La Princesse de Cleves*, dans *Romans et Nouvelles*, Classiques Garnier, Bordas, 1990, p. 279.

51) *Ibid.*, pp. 281-282, p. 296.

52) *Ibid.*, pp. 283-284.

の記号とするコード、すなわち、レヴィ＝ストロースの記述する原初のノマド集団<sup>53)</sup>から父系社会が綿々と受け継いできたコードのなかで、このコードを支える基盤の衰えが描き出されているのである。

父の愛人から恋人として選ばれた国王アンリ二世の宮廷では、貴族の婚姻の取り決めにも際しても、家長や国王の権限が揺るがされている。シャルトル夫人が娘の結婚相手を求めて、シャルトル嬢を宮廷に連れてきた際に、クレーヴ公もギーズ騎士も一目見るなり彼女との結婚を望むが、彼らふたりのそれぞれの家長に当たる人物が、シャルトル嬢の叔父で父親代わりのシャルトル侯という一門の家長と言うべき人物を口実に、シャルトル家との婚姻に反対する。シャルトル夫人が「さんざん調べたあげく、目をつけた」モンパンシエ家の嫡子も、本人は結婚に「乗り気だった」<sup>54)</sup>のに、国王の反対によってこれもまた破談になる。表向きは、婚姻は家長と家長の間で執り行われる交換取引であり、最終的な承認を与える権限は国王にあること、したがって、家長が家長であることを保証するのも、また貴族間の交換、流通を保証するのも最終的には国王であるという原則が遵守されたかのように見える。しかし、真相は、クレーヴ公の父ヌヴェール公と国王が反対したのは、いずれも自分自身の意思というより、ヴァランチノワ夫人におもねったためであった。ヌヴェール公は、シャルトル侯の敵であるヴァランチノワ夫人と「密接な関係」にあったから反対したのであり<sup>55)</sup>、また国王の方は、王太子妃を憎むヴァランチノワ夫人が、王太子妃の後押しするこの結婚を「懸命に妨害し」、「国王にさんざんよくないことを吹きこんでおいた」から反対したのであった<sup>56)</sup>。女、子供の手の届かないところで決定されるはずの事項が、最終的には女性の、それも愛人の一存で決定されているというわけである。家長や国王といった人物が、自分たちの権力の根幹に関わる部分で、制度の形骸化に荷担している。

ここでもまた、父系社会、中央集権的絶対王制のシステムが語られると同時に、そのシステムの中核にある綻びが語られている。語るということが、ことばを基礎づけ、ことばに浸透しているものの不安定さを同時に語ることになっている。

こうして、宮廷はその中心の空虚さを顕わにしてゆく。中心に近づけば近づくほど、中心が語られれば語られるほど、中心ということばが本来持つべき意味が遠のいてゆく。宮廷人たちは太陽のまわりを周っている惑星のふりをしながら、ブラックホールのまわりを周っているの

53) Lévi-Strauss C., *Les Structures élémentaires de la Parenté*, Plon, 1967.

54) Mme Lafayette, *La Princesse de Clèves*, dans *Romans et Nouvelles*, Classiques Garnier, Bordas, 1990, p. 266.

55) *Ibid.*, p. 264.

56) *Ibid.*, p. 268.

である。

いくつもの派閥に分かれ、利害の対立だらけの宮廷は、国王の死という一大事を前にしてひどく動揺 (agitation) していた。もっとも、あらゆる動きは隠されていて、だれもがひたすら、王の容態を気づかっているように見えた<sup>57)</sup>。

これは、王の死を目前に控えた宮廷の描写であるが、『クレヴの奥方』における宮廷の究極のさまがここにある。宮廷人とは王を中心に動いている「見かけ」を装う者であり、宮廷とは王を中心とする制度の施行という「見かけ」が演じられる場所である。王は「見かけ」を構成するための「見かけ」の指標として、あらゆる「見かけ」の中心なのである。そして、「見かけ」の裏に、分裂や対立、動揺、すなわち、反中心とでもいうべきものが「隠されて」いる。かつてシャルトル夫人は、宮廷に出て間もない娘に、「この宮廷では見かけで判断すると、たいいてだまされることになりますよ。真実が見かけどおりということはめったにありませんからね<sup>58)</sup>と教えていた。たしかに、「見かけで判断」された場合、「真実」は「見かけ」と相反するかもしれないが、同時に、「見かけ」によって隠蔽され、保護されるであろう。しかし、あらかじめ「見かけ」として語られた「見かけ」は「真実」を隠すというよりも、隠しながら示すので、宮廷の「動揺」は収拾されないまま読みとられる。そう読みとられるように書かれている。

アンリ二世死去直後の描写においても、同じようなことが観察される。以下に挙げるのは、第三部の結びの文章で、新王太后（カトリーヌ・ド・メディス）、新国王（フランソワ二世）、新王妃（メアリスチュワート）がルーヴル宮に入城する際の、新王太后の新王妃に対する態度を語っている。

一行が歩き出そうとしたとき、彼女（カトリーヌ・ド・メディス）は数歩あとにさがり、義理の娘である新王妃にむかって、あなたが先頭を歩くのですよ、と言ったが、この謙讓のことばには礼儀よりもとげとげしさが、ありありと見てとれた<sup>59)</sup>。

ここでは、「謙讓のことば」や「礼儀」という「見かけ」が「とげとげしさ」をもはや隠しきれず、姑の嫁に対する憎しみ、すなわち、宮廷の「動揺」の一端が「ありありと見てとれ」る状態にあるが、注目すべきは、いずれの例においても、「見かけ」あるいは「見かけ」とな

57) *Ibid.*, p.375.

58) *Ibid.*, p.277.

59) *Ibid.*, p.376.

べきものが、宮廷社会の「礼儀」であり、隠蔽されるべき「真実」が「動揺」であるということである。『クレヴの奥方』において、「見かけ」はどこまでも「真実」によって裏切られるものでしかない。「礼儀」は「動揺」を隠蔽すると同時に、「動揺」のしるしとなっている。

いっぽう、エリアスの『宮廷社会』においては、事情は異なる。もちろん、すでに第一章において、同じく『宮廷社会』の文章からの引用部で見たように、「見かけ」は「情念」という心のなかの「動揺」を隠すものである。しかし、「動揺」を隠すのは、国王を中心とする秩序のなかに、自らをよりよく組み込むという目的のためであり、国王という中心の指標は「見かけ」ではない。そのため、「見かけ」が個人的レベルを超えて、「礼儀作法」として様式化された場合には、「同一性 (identite)」の証明となり、本物として機能する。

したがって、礼儀作法の〈実践〉は宮廷社会の〈自己表現〉であった。国王をはじめとして、各個人が持っている威信および相対的な権力上の位置は、礼儀作法を通じ、他人によって証明されるのである。個々の人間の威信を決定する社会的評価は、ひとつの共通の行為において、特定の規則に則った、個人相互間の行動様式によって表現される。この共通の行為がそのまま、宮廷人を宮廷社会の人間とする存在の絆を明らかにする。宮廷人のこうした威信は、行動様式によって本物であることが確認されなければ無に等しい。このように威信を証明することや礼儀作法の遵守が重視されているが、それは〈外見なこと〉を追い求めているのではなく、宮廷人の個人としての同一性に必要不可欠なものを確認するためである<sup>60)</sup> (〈〉使用は原著者による、以下同様)。

「礼儀作法」として様式化された「見かけ」は、宮廷社会の共通言語として個人を宮廷社会内に位置づけ、宮廷人としての「同一性」を立証するが、共通言語が成り立つのは、ひたすら、国王の「同一性」が確認されているからであり、国王という「本物」の指標があるからである。たしかに、エリアスの描く宮廷においては、国王が名実ともにその中心であり、すべての指標となっている。

宮廷社会における生活は平穏無事な生活ではなかった。同じサークル内で人々は絶えず避け難く動き回り、サークル内の人数は増大した。彼らは押し合い圧し合いし、威信表示の機会や宮廷内で序列をめぐる争った。いざこざ、陰謀、だれかれの愛顧をめぐる争いは

---

60) Norbert Elias, *La Societe de cour*, traduit de l'allemand par Pierre Kamnizer et par Jeanne Etoire, Flammarion, 1985, p. 94.

やむことがなかった。だれもが他者に依存し、すべての者が国王に依存していた。

(…) 将来の保障などどこにもなかった。だれもが地位の高いひとたちと手を結んだり、むだな反感を買うのを避けたり、手ごわい敵との戦いのために策略を綿密に練ったりしなければならず、ひとに近づくにしても離れるにしても、自身の立場や自分の<相場価値>に応じ、厳密に調節して動きを図らなければならなかった<sup>61)</sup>。

ここには、国王を焦点とする遠近法のなかに収まらないものは何一つない。「だれもが他者に依存し、そしてすべての者が国王に依存している」宮廷においては、「わたし」はつねに宮廷人たちという「他者」との関係のなかにありながら、「わたし」と「他者」のこうした関係がまるごと国王との関係に包括され、かつ、「わたし」と国王という関係も共存している。したがって、直接的にも間接的にも「わたし」を規定するすべての関係は国王というひとつの中心、ひとつの指標に準拠する。「わたし」と「他者」の「押し合い圧し合い」も「争い」も最終的原因は国王にあるなら、これに対処するための指標も国王にある。すべてが国王という一点に収斂することで、「相場価値に応じ」た「調節」を試みることができる。ここでは、したがって、「見かけ」も「隠されてのもの」、いずれも、指標をにらみながらの「調節」の結果である。エリアスの宮廷人にとってなにより大切なのは、自分の「威信および相対的な権力上の位置」であり<sup>62)</sup>、国王という指標が宮廷人たちの相対的な位置の絶対的な保証となる。

こうした唯一の揺るぎない指標によって秩序づけられた世界においては、いかなる「動揺」も最終的には秩序のなかに收拾される。ことばが持ちうる意味の複数性、曖昧さもこの指標に準拠し解決されるはずであり、ことばが言い残すものはないはずである。この秩序に収まらないもの、この秩序のなかで語ることのできないものは「外部の闇」に追放され、沈黙のなかに押し込められる。

これに対し、『クレヴの奥方』において、国王はみずからの陰画によって、宮廷はこの「外部の闇」、すなわち、「動揺」によって、あらかじめ侵食されている。宮廷が「動揺」しているのは、アンリ二世の死が迫っているときや、死去のときだけではない。王が健在のころからすでに「動揺」していた。つねに、彼の手の届かないところで「動揺」していたのである。

恋はかならず政治にからみ、政治は恋と切り離すことができなかった。心穏やかに超然としている者など一人もいない。だれもが出世しよう、取り入ろう、力になろう、あるいは

61) *Ibid.*, pp. 97-98.

62) *Ibid.*, p. 94.

邪魔をしてやろう、ということしか考えず、退屈や無為を知らず、いつも快樂と陰謀に明け暮れていた。宮廷の女性たちはそれぞれ、王妃、王太子妃、ナヴァール妃、王妹の宮、ヴァランチノワ夫人のいずれかと個人的に結びついていた。(…)これらの派閥は互いに張り合い、妬み合っていたが、ひとつの派閥の内部にも、寵愛や恋人をめぐる嫉妬があった。権勢や出世への欲が、それほどものものしくはないものの、同じように切実な、こうした欲望に絡んでいる場合が多かった。そのため、この宮廷には、無秩序を伴わない一種の動揺 (agitation) があった (…)<sup>63)</sup>。

宮廷を「動揺」させているのは、つねに、「わたし」と「他者」の利害の対立や情念のひしめき合いであるが、「わたし」と「他者」の関係を包括するべきひとつの中心、指標となるべきひとつの中心が十全に機能していないために、宮廷は、「個人的」な結びつきが醸しだす「動揺」を收拾することも排除することもできない。しかし、「動揺」は宮廷を「無秩序」に陥らせてしまうには至らない。「動揺」は宮廷を蝕みつつ支えるものとして共存する。ひとつの中心の代わりに、複数の中心、それも国王周辺の女性を核とする複数の中心が宮廷を支え、宮廷に依存しながら、宮廷を揺さぶり続ける。「わたし」と「他者」の「個人的」な関係が公的關係、制度をその内部から蝕む。蝕みながら存続させる。蝕むことと存続させることが同一になる。

#### 4

『クレヴの奥方』の宮廷が王妃、王太子妃、ナヴァール妃、王妹の宮、ヴァランチノワ夫人という複数の女性によって分割されているのはすでに見たが、彼女たちの制度上の身分が一樣でないように、彼女たちの持つ力も同一ではない。この五人の女性たちの身分を比較すると、王妃と王太子妃のように、婚姻によって王家のなかに入ってきた女性と、ナヴァール妃と王妹の宮のように、王家に生まれたけれども、結婚によって外に出て行く女性、そして、ヴァランチノワ夫人のように王家とは制度上の関係を持たず、アンリ二世の私的身体との関わりによってのみ権力を持っている女性の三種類に分類される。このうち、最初の、王家に嫁ぎ、王家を支える王妃、王太子妃と、最後の、国王の私的身体との関わりによって権力を得ているヴァランチノワ夫人のあいだで、権力や個人的な力、威信において著しい差異が観察される。

王家に嫁ぎ、王家のなかに入って王家を支える女性たちは、婚姻によって、王権を委譲され

63) Mme Lafayette, *La Princesse de Clèves*, dans *Romans et Nouvelles*, Classiques Garnier, Bordas, 1990, pp. 294-295.

ていると考えるためか、ときに、王権のディスクールを借用する。じっさい、アンリ二世自身は王権のディスクールの発話者になることはほとんどなく、もっぱら妻である王妃と嫁である王太子妃がこれを用いる。

シャルトル候を恋人にしたいと望む王妃は、彼に愛人がいるのかを探ろうとして、次のように彼を脅す。

あなたはだれにも打ち明けていないから、自分の恋がだれにも知れていない、と思っているでしょうけれど、知られているのですよ、関係のあるひとたちにさえも。あなたは見張られています。あなたがどこで逢引をするのかもわかっているし、その場であなたがたに不意打ちをかけようという計画もあるのでから<sup>64)</sup>。

「王のまなざしはすべてをお見通し」<sup>65)</sup>、王はすべてをご存知という観念を想起させることばである。じっさいはなにも知らないにもかかわらず、王妃はこうした権力のディスクールを脅迫のために使用する。

同じようなことが、王太子妃とクレヴ夫人のあいだでも観察される。叔父のシャルトル候が落とした手紙を王太子妃から預かっていたクレヴ夫人は、シャルトル候に頼まれてやって来たヌムール公に手紙を渡してしまう。それを知った王太子妃はクレヴ夫人に怒って、次のように言う。

わたしがあの手紙をあなたに渡したのだから、あなたはわたしの許しもないのに勝手に返してはいけなかったのですよ<sup>66)</sup>。

王太子妃のこのことばは、貨幣を流通させるのが国王であれば、貨幣の帰するところも国王であると同様、手紙もまた書き手や受け手のものではなく、権力によって回覧され、権力に帰すべきである、という主張として読むことができる。

王妃も王太子妃も、こうしたことばを国家の運営に関わる事態で述べているわけではなく、私生活の卑近な局面で口にしてしているために、いささか不当で滑稽な感じを免れえない。権力のディスクールは、本来の発話者と発話の場をずらされて使われることによって、みずからの偽

64) *Ibid.*, p. 331.

65) Molière, *Tartuffe*, Acte V, scène dernière, Flammarion, 1997, pp. 145-146.

66) Mme Lafayette, *La Princesse de Clèves*, dans *Romans et Nouvelles*, Classiques Garnier, Bordas, 1990, p. 343.



物、贋金のような存在になる。そして、この贋金のようなディスクールによって回収された手紙も、やはり偽物である。クレーヴ夫人とヌムール公が捏造した偽の手紙が王太子妃のもとに届けられ、王妃に送られる。王妃はこれが偽物であることに気づき、後にシャルトル侯を亡き者にするが、それでも、恋人たちがはしゃぎながらでっちあげたお粗末な手紙が、制度によって保証された、いわば正当な (légitime) 立場の女性たちの権威を失墜させていることには変わりがない。

国王という、本来、宮廷社会の指標となるべき人物の権威が揺るがされているこの『クレーヴの奥方』において、王権は王権のパロディとして語られる以外になく、王妃や王太子妃の権威も結局は裏切られるためのものでしかない。シャルトル侯はテミーヌ夫人やマルチーフ夫人のために王妃を袖にする。シャルトル侯は「王妃の寵愛を完全に失うが、マルチーフ夫人を愛し、自由を愛する侯は、この失寵で受けて当然のはずの痛手を感じることをさえない<sup>67)</sup>。ヌムール公はクレーヴ夫人への愛情のために、王太子妃を利用する。彼は、「ヌムール公のことならなんでも知りたがる」<sup>68)</sup> 王太子妃の部屋をよく訪れるが、それは「クレーヴ夫人がそこによく来るからであり、みんなに彼が王太子妃を愛しているらしい、と思わせておくのも悪くないと思うからであった」<sup>69)</sup>。ヌムール公がクレーヴ夫人の肖像画を盗む場面においても、予言の話題の場面においても、王太子妃はつねに人物たちの中央に位置し、いちばん多くの情報を握っている者として振るまい、発言するが、じっさい、王太子妃の位置からはヌムール公が肖像画を盗むようすを見ることができないし<sup>70)</sup>、予言についてヌムール公がクレーヴ夫人にした内緒話を聞くこともできない<sup>71)</sup>。王妃が、脅しのこととは裏腹に、シャルトル侯の恋をまったく見抜くことができなかったように、中央の位置、すなわち、制度の保証する位置からは、見ることも聞くこともできないものがここにはある。王太子妃を前にして、ヌムール公とクレーヴ夫人のあいだで、ふたりにだけ本当の意味の通ずる話が取り交わされる。光のまなざしを持たない王の宮廷にあっては、見るべき真実、聞くべき真実は権力の届かないところにある。

こうして、制度によって保証された、いわば正当な (légitime) 権威が裏切られるいっぽうで、正当な身分を持たないヴァランチノワ夫人は、フランソワ一世とアンリ二世の二代に渡って、権威に関与している。彼女は権威そのものを横領する。権威が行うべき人間同士の流通を妨げ、支配する。権威の流通回路を操作する。「王に近づくためには、ヴァランチノワ夫人に近づか

---

67) *Ibid.*, p. 377.

68) *Ibid.*, p. 321.

69) *Ibid.*, p. 283.

70) *Ibid.*, pp. 317-318.

71) *Ibid.*, pp. 312-313.

なければならず」<sup>72)</sup>、前章ですで見たとように、モンパンシエ公の嫡子とシャルトル嬢（のちのクレーヴ夫人）の縁談が持ち上がった際には、これを「懸命に妨害 (traverser)」する<sup>73)</sup>。ヴァランチノワ夫人が国王の母でも妻でも、嫁でもないこと、すなわち制度による身分の保証がないことが、彼女に力を与えているかのようである。

ヴァランチノワ夫人はアンリ二世が王権にあるかぎり、すなわち生きているかぎり、この特権を巧みに活用する。アンリ二世の死の前日、王妃はヴァランチノワ夫人が王に会うことを許さない。そればかりか、「王権の形を借りて」ヴァランチノワ夫人に、王からあずかっている印璽と王室の宝石類を返還するようにと使者を送る。これに対し、ヴァランチノワ夫人は王の存命を確認したうえで、「私人として」<sup>74)</sup> 拒絶する。

それなら、まだわたしには支配者はいないということです。陛下がわたしを信頼しておあずけになったものを返せとは、だれもわたしに強制することはできません<sup>75)</sup>。

そもそも、王権の象徴である印璽と宝石を「信頼」の印として愛人にあずけるという行為が国王自身による権力の逸脱であるが、王の存命中に王妃がこれらの返還を命ずることは、王の死の先取りであり、越権行為である。そして、王権の象徴を委ねられている愛人が、自分には「支配者はいない」と主張するのは、王権の象徴のみならず実権も握って離さないという意志表示とその実践である。彼女は王が生きているかぎり、まさしく、「国王そのひとと国家の支配者」<sup>76)</sup>である。本来、王制という制度の保証となるべき王が命のかぎりを尽くして、制度を蝕む力の保証として機能する。君主の崩壊寸前の肉体が愛人の覇権を支えている。王が生きているかぎり、王権の象徴も実権も王妃の手には届かない。王妃は王の死を待たねばならない。

制度が保証してくれるのは名前だけである。正当な身分、正当な名前がここでは空洞のしるしとなる。クレーヴ公がシャルトル嬢の夫になることは、したがって、シャルトル嬢の心を手に入れることができないことの保証となる。

クレーヴ公には、シャルトル嬢が姓を変えることによって気持ちまで変えたとは思えなかつ

72) *Ibid.*, p. 254.

73) *Ibid.*, p. 268.

74) Jean-Michel Delacomptée, *La Princesse de Clèves : la Mère et le coutrisan*, Presses Universitaires de France, 1990, pp. 40-41.

75) Mme Lafayette, *La Princesse de Clèves*, dans *Romans et Nouvelles*, Classiques Garnier, Bordas, 1990, p. 376.

76) *Ibid.*, p. 256.

た。彼女の夫となることで大きな特権は得られたものの、妻の心のなかに彼の占める位置は変わらなかった<sup>77)</sup>。

クレーヴ公はまた、盗まれた肖像画について、じつは妻が恋人に与えたのではないかと疑い、「あなたはあの肖像画をあげてしまったのだ、わたしがあんなに大事にしていた、わたしにこそ正当に持つ権利のある (m'appartenir si légitimement) 肖像画を」と権利の主張をするが<sup>78)</sup>、夫の権利がこのような報いを受けるのは、これまで見てきた物語のシステムから見れば当然のことである。夫という名は、愛されない男のしるし、夫の名において所有する物を奪われる者のしるしとなる。クレーヴ夫人もやがて、ヌムール公に対して、「愛してくれなくなったからといって、恋人をとがめることはあるけれど、夫をとがめることができるでしょうか<sup>79)</sup>、と言うだろう。妻にとって、夫の名は愛してくれなくてもしかたがない男のしるし、というわけである。さらに、クレーヴ公は死の床で夫人に向かって、「あなたを心からの正しい (légitime) 愛情で愛してきた」と訴えるが<sup>80)</sup>、「正しい (légitime) 愛情」だからこそ報われないのである。彼は、「わたしはあなたに愛されて当然 (mériter) だったのに」、「あなたの心を手に入れることができなかった」と言ってなじるが<sup>81)</sup>、「当然 (mériter) だった」からこそ、「手に入れることができなかった」のである。この物語において、所有するという事は制度から掠め取るという、いわば不当な手段で手に入れる、すなわち横領することでしか実現しない。

ドゥラコンテは、女性たちによる男性の分割と交換について興味深い考察をしているが<sup>82)</sup>、彼の考察につけ加えておかなければならないのは、女性たちが男性を分割、交換流通するのも、制度によって権力を保証されていない女性たちだからこそ、制度の外部で交換を行うことが可能なのだということである。

ドン・ジュアンやリバルタンたちの例を引くまでもなく、父系社会集団においては、つねに、男性が女性を戦利品や貨幣のように分割し、流通交換してきた。この分割、流通交換が家父長制を支えてきたといってもよい。しかし、家長、国王の権威が形骸化しているこの宮廷にあっては、国王の家族ではない女性たちが、制度によって自分と結ばれていない男性たちを分割し、流通交換する。

77) *Ibid.*, p. 272.

78) *Ibid.*, p. 353.

79) *Ibid.*, p. 409.

80) *Ibid.*, p. 395.

81) *Ibid.*, p. 395.

82) Jean-Michel Delacomptée, *La Princesse de Clèves : la Mère et le coutrisan*, Presses Universitaires de France, 1990, pp. 100-106.

ヴァランチノワ夫人はアンリ二世と父のフランソワ一世を反目させ<sup>83)</sup>、さらに、アンリ二世とブリッサック元帥を対立させる<sup>84)</sup>。トゥールノン夫人はサンセールとエストゥーヴィルの友情を破壊する<sup>85)</sup>。結婚前のクレーフ夫人、すなわちシャルトル嬢をめぐって、クレーフ公とギーズ騎士との「友情が冷えて」<sup>86)</sup> しまう。ヌムール公とギーズ騎士もクレーフ夫人のために、「ことごとく対立」<sup>87)</sup> する。

制度は女性による男性の分割や流通交換を妨げるどころか、ときに体のよい口実となってこれを助長する。最初の恋人サンセールに飽きたトゥールノン夫人は、心変わりを隠したまま新しい恋人エストゥーヴィルと結婚するために、実際にはなにも命令していない「父親を説得し、結婚を命じさせ」、「ひとには親への義務と服従から」エストゥーヴィルといやいや結婚するのだと思わせようとする<sup>88)</sup>。家父長制の傘の下、父の名に守られながら、娘がふたりの男性の入れ替えをもくろむ。

男性たちにできるのは、せいぜい、自分がだれに所有されているかを誇示することぐらいである。彼らは、心に思う女性のしるしとなる色を嬉々として身につけ、騎馬試合に臨む。その色を所有するのはいずれも王室外の女性たちあり、また婚姻関係によってその男性たちと結ばれていない女性たちである。ヴァランチノワ夫人の色を身にまといながら、王妃に捧げると言っ、もう一戦交えようとした王は命を失う<sup>89)</sup>。捧げるべき相手を間違えたからである。正当な権利を尊重する無邪気な発言はときとして命を奪う。

制度はこうしてその権威を裏切られ、悪用されながら、しかも悪用するものをむしろ助長し包括しつつ、維持されてゆく。みずからを蝕むものをも包括せざるを得ない力、差異をも同一の一部として統合せざるを得ない力、これが『クレーフの奥方』において描き出された近代の権力である。

## 5

『クレーフの奥方』の関心は、しかし、権力や制度と個人がいかに関わり合いをつけるかとい

83) Mme Lafayette, *La Princesse de Clèves*, dans *Romans et Nouvelles*, Classiques Garnier, Bordas, 1990, p. 279.

84) *Ibid.*, pp. 281-282.

85) *Ibid.*, p. 300, pp. 302-303.

86) *Ibid.*, p. 264.

87) *Ibid.*, p. 313.

88) *Ibid.*, p. 301.

89) *Ibid.*, pp. 373-374.

う点にとどまらない。関心はさらに、個人の内面に入ってゆく。

シャルトル侯はテミーヌ夫人を深く愛していたにもかかわらず、彼女から次のような手紙を受け取る。

わたしはあなたから強く愛されていると信じていましたし、わたしもあなたへの思いをもう隠そうとしませんでした。ところが、心のうちをあなたにすっかりさらけ出していたそのときに、あなたがわたしを裏切り、ほかの女 (une autre) を愛している、どう見ても、あなたはそのあたらしい愛人 (cette nouvelle maîtresse) のためにわたしをないがしろにしている、と気づいたのです。(…) わたしはあなたに熱のない、気のない手紙を書くことにしました。あなたからそれを見せられた女 (celle) に、わたしがあなたをもう愛していないのだと思わせるためでした。彼女 (elle) に負けたことをわたしが気づいているのを彼女が知って喜ぶのも、わたしの絶望や非難で彼女がますます有頂天 (son triomphe) になるのもいやでした。(…) あなたは、わたしを彼女 (celle) のために捨てたのに、彼女をすっかり見限ったように思われましたし、彼女に (lui) わたしのことを話していないのもたしかのようでした。(…) あなたは愛情をわたしとほかの女 (une autre) に分け与え (partager)、わたしを裏切りました。そのことだけで、あなたから愛されても嬉しくなくなり、(…) 二度とあなたにお会いするのをやめようと決心することができます (…)<sup>90)</sup>。

ここに語られている「ほかの女」というのは、テミーヌ夫人の想像の産物に過ぎない。この不在の「ほかの女」が、文の主語になったり目的語になったり、所有形容詞になったりしながら、生き生きと動き回っている。テミーヌ夫人にとっていちばん大切なはずであったシャルトル侯よりも、手紙のなかでは、「ほかの女」の存在感の方ががはるかに強い、と言ってよいほどである。とはいえ、この「ほかの女」というのがだれであるのかについては特定もされず、問題にすらされていない。テミーヌ夫人にとって、シャルトル侯に現在「ほかの女」がいるか、いないかということさえ、もはや問題ではない。テミーヌ夫人は、シャルトル侯がこの女性を「すっかり見限ったように思われた」ときに、彼を捨ててしまう。恋人が心を自分と「ほかの女と分け与えた」ことがあると思われること、自分と等価のもの存在を一度でも感じたことが彼女には許し難いのである。彼女がシャルトル侯に「心のうちをすっかりさらけ出していたそのときに」、恋人に伴われるようにして、彼女の心のなかにまぎれ込んでしまった「ほかの女」、自分のなかの「ほかの女」を追い払うために、シャルトル侯との交際を絶つ。テミーヌ夫人ひ

90) *Ibid.*, pp. 324-326.

とりの心のなかで生じたドラマのために、シャルトル候との恋が犠牲にされる。

不在の「ほかの女」を理由に相思相愛の恋に終止符を打つのはテミーヌ夫人ひとりではない。クレーヴ夫人もまた、不在の「ほかの女」のためにヌムール公を拒絶する。夫の死によってヌムール公を受け入れるための制度上の障害がなくなり、ヌムール公への思いをはじめてことばにしたそのときに、彼女は彼を拒絶する。

すでにいくつもの恋をしていらしたあなたですから、これから先もそうでしょう。あなたはいまに、わたしさえいれば幸せだとは思わなくなれるでしょうし、そうなれば、わたしにされたのと同じように、ほかの女 (une autre) になさるのを、わたしは見ることになるでしょう。そのためにわたしは死ぬほど辛い思いをしましょうし、わたしには自分が嫉妬に苦しまないという確信さえないのでから<sup>91)</sup>。

クレーヴ夫人自身は立ち会ったこともないヌムール公の過去（「すでに」）と未来（「これから先」）に、いまは不在の「ほかの女」を想定し、自分が愛するひととともにじっさい立ち会っている、いま・ここにあるたしかな喜びを断念しようというのである。テミーヌ夫人の場合は、シャルトル候が「ほかの女」に一度は心を奪われたことがあると思い込んだまま、彼に絶縁状を突きつけたが、クレーヴ夫人は、ヌムール公が彼女と出会ってからひたすら自分だけに心を捧げてきたことを確信し、彼の心にはいまあるのは彼女ひとりであることを実感する、そのときに、彼をそれ以前の過去と未来のなかに送り込み、「ほかの女」に引き渡す。クレーヴ夫人の心が描き出した不在のものが、いま・ここにある恋を押し流す、押し流そうとする。

そして彼女は、恋人も「ほかの女」も、喜びも「嫉妬」も不在であるべき場所としてのいま・ここに、自分を閉じ込める。

わたしのつとめは、わたしがいまある状態にとどまる (demeurer) こと、ぜったいにそこを離れるまい (n'en sortir jamais) という決意を決して変えないことなのです<sup>92)</sup>。

ヌムール公のためにとりなそうとするシャルトル候にも、彼女は、自分の決心は「いまある状態にとどまることだ<sup>93)</sup>」という同じことばを繰り返す。同じくシャルトル候に彼女は、「自分

91) *Ibid.*, p. 409.

92) *Ibid.*, p. 409.

93) *Ibid.*, p. 412.

に課したきまりを外れるようなことはしたくない (ne pas vouloir sortir de) ので<sup>94)</sup>、手紙にすらヌムール公のことを書いて欲しくないと言う。ヌムール公を過去と未来に送り込みながら、自分は「いまある状態」、すなわち、いま・ここを動かないというわけである。過去、未来、ほかの場所、ほかのひとから隔絶し、どこにもつながらない、凍てついたような一点としてのいま・ここに身を固くして閉じこもることは、すなわち、死に限りなく近い、究極の隠遁である。

彼女のこの隔絶は、しかし、突然のものではない。世間から離れ、母ひとりの手で育てられた彼女は、この「財産も美德も人物も並外れ」、教育について「世の母親たちとは反対の意見」を持つ母親から「美德を愛するように」<sup>95)</sup>しつけられてきたが、この母の「美德」がそもそもきわめて厳格なものであった。彼女は結婚前の娘に、「男たち (les hommes) は誠実さを欠き、騙したり、裏切ったりするものだから、恋は家庭生活を不幸に陥れる。いっぽう、貞淑な妻の生活は穏やかなものであるが、(…) 貞節 (la vertu) を守ることはきわめてむずかしい」<sup>96)</sup>と語り聞かせていた。そして、ヌムール公に心を惹かれている、結婚後の娘クレーヴ夫人に、「あなたがほかの女たちと同じように (comme les autres femmes) 身を落とすのを」<sup>97)</sup>見たくないと言い残して死んでゆく。シャルトル夫人は「男たち」も、「ほかの女たち」も、「恋」も、すべて「美德」の名のもとに断罪し、「恋」を「不幸」の原因として描き出す。この母によれば、「夫を愛し、夫から愛されるのが、女の唯一のしあわせ」<sup>98)</sup>であるが、彼女が勧める「女の唯一のしあわせ」は、制度との折り合い、平穏な日常生活であり、恋愛ではない。じっさい、クレーヴ公の愛情に対して心を動かされることのない娘に、母親ができるのは「クレーヴ公の愛情に感謝しなければならない」<sup>99)</sup>と諭すことだけである。

クレーヴ夫人自身も「美德」が自分の同一性、唯一性の証明であることを信じて疑わない。彼女は自分が恋におぼれ、それがひとに知られるならば、「ほかの女たち (les autres femmes) とはおよそ違う」と思っていた自分が同じになってしまう<sup>100)</sup>と嘆く。さらに、夫やヌムール公にも、自分が「ほかの女たちと違う」ことを主張する。クレーヴ公に告白をするさいに、まず、「これまでどんな女も夫にしたことのない告白をいたします」<sup>101)</sup>と言って口火を切る。この告白のあとも、彼女は夫に、「わたしのしたようなことが、この世にまたとあるはずがありません。あんなことの

94) *Ibid.*, p. 413.

95) *Ibid.*, p. 260.

96) *Ibid.*, p. 260.

97) *Ibid.*, p. 291.

98) *Ibid.*, p. 260.

99) *Ibid.*, p. 272.

100) *Ibid.*, p. 370.

101) *Ibid.*, p. 350.

できる女はふたりといません<sup>102)</sup>と繰り返す。ヌムール公に告白をするにあたって、彼女は同じような主張を前置きにする。「女としてめったにないほど誠実にお話ししましょう」<sup>103)</sup>。彼女にあって、「ほかの女たち」にないもの、それは貞節や誠実、要するに「美德」である。クレーヴ公も出会ったその日から、彼女が羞恥心という美德において、ほかの女性たちと違うことを認めている（「若い女性たちは自分の美しさもたらす効果をいつも喜ぶのが普通であるのに、彼女は彼に見つめられて当惑しているのがわかった」<sup>104)</sup>）。ヌムール公もまた慎ましきという「美德」において彼女の唯一性を認めている。彼は、「すべての女性たち (toutes celles de son sex) とこれほど違う女性 (クレーヴ夫人) に愛されたことを誇りに思う」<sup>105)</sup>。愛の対象が恋人の目にはほかの同性と違って映るのは当然であるから、クレーヴ公とヌムール公の評価は差し引いて考えなければならないとしても、「美德」の名において彼女の唯一性が肯定されると引き換えに、「ほかの女たち」がまとめて否定されている点はいずれも共通している。

とはいえ、「美德」によって否定される「男たち」や「ほかの女たち」が定冠詞複数形のついた抽象的で外在的な存在であるのと同様、これを否定する「美德」も心の外から命令を下すものに過ぎない。そのため、いかに「美德」にしがみつこうとも、「貞淑な妻として (…) 夫を愛し、夫から愛されるという女の唯一のしあわせを心を尽くして求めなければならない」<sup>106)</sup>、という母の教えを彼女は実現することができなかった。心は母の教えや「美德」とつねに折り合うわけではない。「愛することのできない夫」<sup>107)</sup>であったクレーヴ公が彼女の心のなかに入ってくるのは彼の死後、ようやく、彼女が重い病氣から回復してからのことである。

死について考えたことが、彼女をクレーヴ公の思い出に近づけた。夫の思い出が彼女の義務と折り合い (s'accordait à son devoir)、心に強く刻み込まれた (s'imprima fortement dans son cœur)<sup>108)</sup>。

クレーヴ公が「思い出」になってから、すなわち不在によって「義務と折り合い、心に強く刻み込まれ」るのと対照的に、ヌムール公は難なく、一挙に彼女の心に入ってくる。彼は会おう以前から彼女の「好奇心を掻きたて、早く会いたいという気持ちにさえさせ」<sup>109)</sup>、会うなり

102) *Ibid.*, p. 367.

103) *Ibid.*, p. 404.

104) *Ibid.*, p. 261.

105) *Ibid.*, p. 355.

106) *Ibid.*, p. 260.

107) *Ibid.*, p. 270.

108) *Ibid.*, p. 415.

109) *Ibid.*, p. 274.



彼女を魅了し、数日後、「すぐれた容姿と才気の魅力でわずかなあいだにクレヴ夫人の心に強い印象を刻みつけた (il fit (...) une grande impression dans son cœur)」<sup>110)</sup>。美德にこれを妨げることはできない。「椅子を飛び越え」<sup>111)</sup>、「張り巡らされた垣根」をかいくぐり<sup>112)</sup>彼女のところにやって来るヌムール公が彼女の心に触れるのに、「美德」も「義務」も障害にはならない。彼と決別し、病気から回復した後さえも、「ヌムール公は彼女の心から消えていない」<sup>113)</sup>。クレヴ公を心に喚起するために努力するのは逆に、ヌムール公の場合は、心から消すための努力が必要になる。

しかし、心のなかに入ってくるのが恋人だけであるならばともかく、恋人は「ほかの女」を連れてくる。恋人が伴うのは、定冠詞複数形の抽象的な女性ではなく、不定冠詞のついたひとりの女性である。「美德」によって排除することのできない、だれでもありだれでもないこの女性が、「わたし」のなかにも巣食う。「あなたは愛情を彼女とわたしに分け与え」、彼女は「わたしが自分の負けたことに気づいているのを知って喜んだり」、「わたしの絶望や非難でますます有頂天になったり」<sup>114)</sup>する。あるいは、この女性に、「あなた」が「わたしにされたのと同じようになさるのをわたしは見ることになり」、「そのためにわたしは死ぬほど辛い思いをする」<sup>115)</sup>かもしれない。「あなた」に「愛情を分け与えられ」、「わたしと同じように」される「ほかの女」。「わたし」と「あなた」との関係を、「あなた」とのあいだで同じように結ぶ「ほかの女」。「あなた」にとって、「わたし」と交換可能な「ほかの女」が、「わたし」のなかで「わたし」の同一性、唯一性を脅かす。

クレヴ夫人はヌムール公を知るまでは、自分を「ほかの女たち」と比べることもなかったし、まして、「ほかの女」が自分を脅かすことなど想像もしていなかった。「他者と関係を持つ人間」<sup>116)</sup>としての自分を意識することもなく、母のことばのなかで充足していた。恋を知ること、はじめて他者と自己の意識が生まれ、自分の同一性が絶対でないことを自覚する。とりわけ、クレヴ公の悲惨な最後を見ることで、個人が自分に対して抱いているイメージ、ならびに私的な身体、その両方の脆さを彼女は恐怖とともに認識する。

クレヴ夫人の拒絶、「いまある状態」への逃避、これはかろうじて彼女を支えている同一

110) *Ibid.*, p. 276.

111) *Ibid.*, p. 274.

112) *Ibid.*, p. 386.

113) *Ibid.*, p. 414.

114) *Ibid.*, pp. 325-326.

115) *Ibid.*, p. 409.

116) Nobeit Elias, *La société de cour*, traduit de l'allemand par Pierre Kamnizer et par Jeanne Etoré, Flammarion, 1985, p. 99.

性のイメージ、すなわち、「ほかの女たちとは違う」「貞淑な妻」という自己イメージに自分を一致させることへの固執に他ならない。同一性は身体にとってその表象であり、「わたし」というよりも「わたし」の表象であるが、これを脱ぎ捨てるならば、「わたし」が崩壊してしまうだろう。「わたし」を守るために「わたし」の表象を守らなければならない。ヌムール公が彼女に向かって、「美徳も義務もあなたに強制するはずのない掟を、あなたがひとりで自分自身に押しつけているのです」と言うように<sup>117)</sup>、あるいはまた、すでに挙げた例であるが、彼女自身がシャルトル侯に「自分に課したきまりを外れるようなことはしたくない」と言うように<sup>118)</sup>、「美徳」や「義務」が彼女に拒絶を命ずるのではない。彼女が「美徳」や「義務」に拒絶を命じさせるのである。そうすることが彼女にとって同一性の実践となるからである。

いっぽう、愛人から拒絶された男性たちはふたたび流通交換のサークルのなかに戻ってゆく。シャルトル侯はマルチーフ夫人というあたらしい愛人の手に渡る。後年、彼はテミーヌ夫人やマルチーフ夫人のためにないがしろにした王妃の恨みによって命を落とすが、「人一倍色恋の華やかな」<sup>119)</sup>人物として登場したシャルトル侯であるから、「色恋」に命を捧げることでみずからの同一性をまっとうするのである。シャルトル侯と似た者同士の片割れ (*le vidame de Charetre était seul digne d'être comparé au duc de Nemours*)<sup>120)</sup>であるヌムール公については、「何年かが過ぎ、歳月とクレーフ夫人の不在が彼の苦悩を癒し、彼女への恋を消し去る」<sup>121)</sup>。クレーフ夫人を知ってから、親友のシャルトル侯や王太子妃に「ひとが変わった」<sup>122)</sup>と指摘され、自身も「われながら自分とは思えない」と言うほど<sup>123)</sup>性格が変わってしまったヌムール公であるが、クレーフ夫人と訣別することで、彼もまた同一性の世界に戻ってゆく。彼に心を打ち明ける以前、クレーフ夫人は、「女性たちのあいだをいつも身軽に渡り歩いてきた」ヌムール公に「いつまでも変わらない愛情 (*un attachement durable*)」<sup>124)</sup>を期待できないと考えたが、「いつまでも変わらない愛情 (*un attachement durable*)」を持たずに、「女性たちのあいだをいつも身軽に渡り歩く」のがヌムール公の不変の姿、同一性の証である。「不実な恋人だとか、一度に何人もの女性と関係したとって責められたことがある」<sup>125)</sup>、とみずから言う彼にとって女性は本来複数であり、「不在」のクレーフ夫人に彼の流動をつなぎとめることはできない。

117) Mme Lafayette, *La Princesse de Clèves*, dans *Romans et Nouvelles*, Classiques Garnier, Bordas, 1990, p. 410.

118) *Ibid.*, p. 413.

119) *Ibid.*, p. 255.

120) *Ibid.*, p. 255.

121) *Ibid.*, p. 416.

122) *Ibid.*, p. 289., pp. 306-307.

123) *Ibid.*, p. 308.

124) *Ibid.*, p. 347.

125) *Ibid.*, p. 337.

流動が彼の過去と未来を結び、同一性の時間をなめらかに紡ぎだす。

## 6

同一性に支配されたこのドラマにおいて、ひとは自分を変えることはできないのか。そもそも、変化が成立するほど同一性は確固としたものなのか。

クレーヴ公は、親友のサンセールが愛人トゥールノン夫人を失って悲嘆に暮れている場面に二度立ち会う。生前のトゥールノン夫人は恋人にとってのみならず、クレーヴ夫妻にとっても立派な人物としてとおっていた。クレーヴ夫人はトゥールノン夫人について、「わたしがいちばん好きだったひとですし、慎み深く人柄もすぐれたひとだった」と述べ、またクレーヴ公も妻に「宮廷で彼女ほど尊敬できるひとはいない、と何度も言っていた」ほどである<sup>126)</sup>。

トゥールノン夫人の死の翌日、最初にクレーヴ公がサンセールを訪れたとき、愛人の裏切りをまだ知らないサンセールは心のなかにある忠実な愛人像を増幅させながら、クレーヴ公に言う。

旅行中の彼女からあまり手紙をもらえなかったからといって、変だとは思わない。彼女  
ことはよくわかっているし、手紙を出しづらかったのも知っているから。彼女が戻ったら  
結婚するはずだったのに。世の中に、これほど愛すべき忠実な女性はいないと思い、その  
ひとに心から愛されていると信じていたのに<sup>127)</sup>。

トゥールノン夫人の生前、いつときは「彼女の愛情がいささか冷めてきたように思った」<sup>128)</sup> こともあるサンセールであるが、彼女の突然の死によって、「その面影がこの世でいちばん完璧なもの、彼にとっていちばん完璧なものとして心のなかに」<sup>129)</sup> 刻みつけられる。こうして、死がトゥールノン夫人をいわば永遠化し、理想化したその翌日、サンセールは愛人の裏切りを知る。

二度目にクレーヴ公が訪れたとき、サンセールは「前のときとはうって変わった」<sup>130)</sup> ようすをしている。サンセールが思い、信じていたトゥールノン夫人のイメージが覆され、そのこと

126) *Ibid.*, p. 293.

127) *Ibid.*, p. 299.

128) *Ibid.*, p. 298.

129) *Ibid.*, p. 300.

130) *Ibid.*, p. 300.

が彼自身を変化させたためである。じっさい、彼女のイメージ、いわゆる同一性を変えたのは彼女自身の性格や行動の変化というよりも、彼女についての情報の変化であるが、サンセールにとって、死んでしまった愛人の同一性の崩壊は、彼女に対する思いの消滅、愛情の解消とはならない。彼はむしろ、裏切りを知ったのちでも変わらないものを強調する。彼はクレヴ公に言う、「彼女の死は彼女が忠実であった場合と同じく悲しく、彼女の不実には彼女が活着しているかのように辛い」<sup>131)</sup>。彼はまた、こうも言う、「彼女の偽りの愛情に対して、これまで本当の愛情によって引き起こされるものだと思っていた悲しみをわたしは捧げている」<sup>132)</sup>。彼女が築き上げた評判やイメージが覆されたあとでも、彼の心においてトゥールノン夫人が占める重みは変わらない。故人の欺瞞によって支えられていた同一性が失われたあとでも、彼の心がある種の連続性を支え続ける。

いっぽう、クレヴ公にとって、不実が暴露されたトゥールノン夫人はかつての彼女とはまったく別人である。彼は彼女の死を悲しんでいるクレヴ夫人に言う、「トゥールノン夫人のことを、慎み深く、尊敬に値するひとだと思って悲しんでいるなら、もう嘆くのはやめなさい」<sup>133)</sup>。トゥールノン夫人が「慎み深く、尊敬に値するひと」でなくなることで、かつての彼女に対する友情がきれいに精算されるかのようなのである。

もちろん、クレヴ公とサンセールでは、生前のトゥールノン夫人との距離が違うのだから、彼女の死と彼女の行為に対する反応が異なるのも当然であるが、注目すべきは、クレヴ公が、こうした事件の顛末を目の当たりに見て、ますます、クレヴ夫人の唯一性、この唯一性に支えられた同一性についての確信、こうした妻を得た自分の幸せについての確信を強めてことである。彼は妻に言う、「女性というものはわからないものだ。どんな女性たちを見ても、あなたを得た自分のしあわせにいくら感謝しても足りないくらいだ」<sup>134)</sup>。このときのクレヴ公にとって、サンセールの身に起こった不幸は自分にはまったく縁のないものであるばかりでなく、クレヴ夫人がほかの女性たちとまったく異なるように、自分とサンセールのあいだにもいかなる共通点もないかのようなのである。トゥールノン夫人の裏切りを知る以前に、サンセールが彼女の心変わりを心配していたときも、三男であるサンセールにクレヴ公の与えた忠告は、一般論である。「トゥールノン夫人の愛情は二年も続いたのだから、冷めたとしても驚くに当たらないし、(…)もとより、君との結婚は彼女にとって不利であるうえに、彼女の評判を落と

131) *Ibid.*, p. 300.

132) *Ibid.*, p. 302.

133) *Ibid.*, p. 293.

134) *Ibid.*, p. 293.

すものだから、世間一般から見れば、とんでもないことだろう (…)<sup>135)</sup>。クレーヴ公は、自分もかつて夫人と結婚する以前は、次男である自分にシャルトル夫人が娘を与えてくれるか心配したことがあり<sup>136)</sup>、また、自分自身、夫人に対してつねに変わらぬ愛情を抱き続けている身であるということを忘れていたかのようなのである。彼は自分の語ることばが自分自身にふりかかってくるという事態を想像すらしない。

妻の告白を聞く以前、すなわち、クレーヴ夫人に「だれか好きなひとがいる」ということを知る以前のクレーヴ公にとって、彼が見聞きする事柄も、彼自身が語ることばも、概して、彼自身とは直接関係のない、遠く離れたものであった。彼はトゥールノン夫人の心変わりを懸念するサンセールに、「自分自身への忠告にしたい」と前置きしながら、つぎのように言う。

もしわたしの愛人、いや、たとえ妻であっても、だれか (quelqu'un) 好きなひとがいると打ち明けてくれたなら、わたしは悲しみこそすれ、怒りはしないだろう。そして、恋人なり夫なりの立場を離れて、助言を与え、同情してやるつもりだ<sup>137)</sup>。

この発言は、相手の立場に身を置いて語られたものでは決してない。あらかじめ「恋人なり夫なりの立場を離れ」、つまりだれでもない立場で語られたものであり、また、「若さに珍しく慎重な」<sup>138)</sup>自分と、どこまでも貞淑な妻、クレーヴ夫人という、ふたりの同一性が不変のものであるという前提に支えられたものである。このときのクレーヴ公は「だれか好きなひとがいる」と打ち明ける妻がクレーヴ夫人になることがあるとは思ってもみず、また、そうした妻に「助言を与え、同情してやる」夫が自分になることがあるとも想像すらしていない。

ヌムール公がクレーヴ夫人の肖像画を盗んでしまったときも同様である。クレーヴ公は夫人に向かって「本気でそう思っているのではないことがわかるような口ぶりで」、「あなたにはだれかきつと隠れた恋人 (quelque amant caché) がいて、あなたがそのひとに肖像画をあげたのか、あるいはそのひとが盗んだのでしょうか」、と言う<sup>139)</sup>。聞き手の夫人にとっては指示対象ははっきりしているのに、発話者の彼はそれを知らない。結婚後のクレーヴ公が、よしんば、「彼女を妻として得ただけでは満足できない気持ちがいつまでも消えなかった」<sup>140)</sup>としても、彼と妻のあいだに「だれか」「隠れた恋人」が存在するのを知らないかぎり、彼は、具体的な指示対

135) *Ibid.*, p. 298.

136) *Ibid.*, p. 263.

137) *Ibid.*, p. 298.

138) *Ibid.*, p. 255.

139) *Ibid.*, p. 318.

140) *Ibid.*, p. 272.

象を持たないことばが構築する世界に安らぎながら、「若さに珍しく慎重」人物として発話し続ける。それがクレヴ公の同一性となっていた。

クレヴ公は、要するに、この同一性と、それを支えているであろう「理性」を通して世界を眺め、そこから発話していた。「だれか」「隠れた恋人」の存在を疑いさえしないクレヴ公は、自分の「理性」も疑うことはない。この「理性」にしたがい、これを逸脱するものを彼は排除していた。クレヴ公は、トゥールノン夫人の裏切りを知り「我を忘れたようになってい（comme s'il eut été hors de lui-même）」サンセールに、彼の錯乱の理由も知らないまま、つぎのように言う。

わたし（クレヴ公）は彼（サンセール）に言ってやった、彼がいくら嘆き悲しもうとも、節度を失わないうちはもっともだと思い（*approuver*）、同情もしたが（*y entrer*）、絶望に身を任せ、理性を失っているならば、気の毒だと思えなくなる、とね<sup>141)</sup>。

クレヴ公はここで、「節度」と「理性」から外れるものは容認（*approuver*）できず、共感（*y entrer*）もできないと述べている。「節度」と「理性」を失っている「彼」を否定し、自分から切り離す、このときのクレヴ公にとって、「わたし」が「彼（サンセール）」になることがあるうとは想像もできない。

しかし、クレヴ公が「若さに似合わず慎重」で、「理性」と「節度」によって保証された同一性の世界に安閑としていられるのは、ことばと指示対象が結びつくまでのあいだだけである。ことばが自分の現実になり、「だれか」の存在が明らかになったとき、彼の理性は崩壊する。かつて「節度」と「理性」のなかで「彼（サンセール）」に語ったことばを、「節度」と「理性」の外から語りなおす。そうすることで、「わたし」は「彼」になる。クレヴ公は夫人に言う。

ヌムール公への情念をあなたが乗り越えることができるだろうなどと、よくもそんなことが信じられたものだ。そんなことが可能だと信じたなんて、わたしは理性を失っていたに違いない。（…）わたしがあなたに期待したことと同じくらい不可能なことを、あなたはわたしに期待したのだ。わたしが理性を失わずにいられるなんて、どうしてそんなことをあなたは期待できたのですか。あなたはわたしが狂おしいまでにあなたを愛していることを、そして、わたしがあなたの夫だということを、忘れていたのですよ。このふたつのう

141) *Ibid.*, p.300.

ち一方だけでも常軌を逸してしまうに足りることなのに、両方が重なったらどうなるのでしょう<sup>142)</sup>。

「あなた」の「理性」を信じた「わたし」の「理性」が否定され、「わたし」の「理性」を信じた「あなた」の「理性」も否定される。「わたし」のなかで、「わたし」と「あなた」の区別、「わたし」の「理性」がそうあると信じていた世界の秩序が崩壊する。同時に、これまで「わたし」が語ったことばのなかの「わたし」と、いま・ここで語っている「わたし」が同一でなくなる。「わたし」が「わたし」でなくなる。

やがて嫉妬に貪られるようにして死んでゆくクレーヴ公は、死の床で夫人に次のように言う。

あなたへの愛はあなたが目にした以上のものであったのに。あなたにうるさがられはしないか、夫らしくない態度をあなたに蔑まれるのではないかと心配して、できるだけ見せないようにしてきましたがね<sup>143)</sup>。

「夫らしい」態度を心がけていたときは、夫人への「愛」を隠していたと言うが、嫉妬に蝕まれ、死にゆく身体だけの存在となった彼において、「らしい (*convenir*)」と「らしくない」の区別、隠すものと見せるものの区別、自己イメージと現実の自分の区別が崩壊し、差異と同一が意味をなさなくなる。意味が停止する。

同一性はたしかに、表象としての身体が私的身体を抑圧し、封じ込めることによってかろうじて保持される。しかし、この過程をひとたび経験した私的身体は、みずからを抑圧している表象にいわば外から支えられずには存在しえない。表象としての身体は、「歳とともに衰える私的な身体」によって内部から蝕まれながらも、私的身体を覆い隠し、消し去ろうとする努力によって私的身体を守り、みずからを支えてゆく。これが同一性の保持である。王の不滅の身体はこうして獲得される。しかし、王権を持たない一介の宮廷人、一介の個人にとって、線の時間のなかでの同一性の保持は、積み重ねであると同時に磨耗であり、永遠のものではない。物語において、ヌムール公もクレーヴ夫人も肖像画を残しているが、若さの盛りに描かれた輝かしい身体だけが同一性を保持する努力を免れ、時間の侵食を知らず、恋の記憶を永遠にとどめる。

142) *Ibid.*, pp. 381-382.

143) *Ibid.*, p. 395.